

「入学は簡単だが卒業は難しい」 大学教育の欧米スタイル導入はなぜ失敗したか

今更な感じがするが、サッカーのワールドカップを観て、ずっと考えてきたことがある。日本代表の予選敗退については、さまざまな議論があり、素人でしかない筆者が入り込む余地はない。ただ、筆者の海外経験から、考えさせられることはいろいろあった。例えば、元日本代表・名波浩氏のTV解説でのコメント「他国のエースは、得点の絶好機に『危険な場所』に立っている」は、大変興味深いものだった。

W杯での本田、香川らの 「予想を超えた勤勉さ」

日本と対戦した敵のエースたち、ディディエ・ドログバ（コートジボワール）、ハメス・ロドリゲス（コロンビア）のピッチ上での動きを思い出してみる。彼らは本田圭祐や香川真司ほど、前線で走り回っていた印象はない。「全員攻撃、全員守備」は現代サッカーの基本的な戦術なので、彼らも守備をするように監督から指示があったはずだが、適当に「やったふり」をしていたように見えた。その代わりに、味方がボールを奪取して攻撃に転じた時には、ドログバやロドリゲスは、一瞬にして観ているこちらが肝を冷やすような、絶好の場所に立っていた。

一方、名波氏の指摘は、本田、香川、岡崎ら日本の攻撃陣が、得点の絶好機にもかかわらず、「危険な場所」にいなかったということでもある。彼らは、アルベルト・ザッケローニ監督の「前線からの守備」という指示を守るために、実に「勤勉」にボールを持つ敵を追い回していた。だが、味方がボールを奪い返して、いざ攻撃という時、ゴールを狙うラストパスを出したい場所に、彼らエースたちはいなかったのだ。

ザッケローニ監督の誤算は、本田、香川、長友、内田らワールドクラスと評価された選手たちの「予想を超えた勤勉さ」だったのではないだろうか。監督は、日本人の戦術的指示を忠実に守る「勤勉さ」を愛していた。たが、まさかワールドクラスの選手が、ここまで「勤勉」であるとは、監督の常識を超えていたのだろう。

ザッケローニ監督の母国イタリアでは、監督が選手に戦術面のみならず、集団生活から厳しい規律を課している。それは、イタリア人が真面目な国民性だからではない。むしろ逆である。イタリアの選手たちは基本的に我儘で、勝手な事ばかりするから、厳しい規律なしではチームとして成り立たないからである。

しかし、どんなに厳しい規律を課しても、「10番」のエースプレイヤーの我儘を抑えることができない。むしろ、規律を逸脱した我儘さは、時に観る者を圧倒的に魅了する「ファンタジー」あるスーパープレーを生むとして、最終的には称賛されてきた。

ザッケローニ監督は、日本人は「勤勉」な民族だと思っていたが、本田や香川らワールドクラスの選手は、究極的には我儘だろうと思いこんでいたに違いない。試合の状況によって適当に規律を逸脱し、決定的な仕事をしてくれるだろうと信じていたはずだ。ところが、彼らは監督の指示を愚直に守り、最後まで「勤勉」なだけで終わってしまった。

端的に言えば、ザッケローニ監督の失敗は、我儘なイタリア人を躰けるための厳しい規律を、そのまま日本人に課してしまったことだ。それは、日本人に対して「やり過ぎ」となってしまったのだ。日本人選手は、イタリア人の監督からすれば、まさに理想的なほど規律ある組織を作った。しかし、次第にその規律でがんじがらめになっていき、最後は「思考停止状態」に陥った。それは、脇役のチームプレーならわかる。しかし、規律を逸脱したスーパープレーを期待したエースまでもが、ただ「自分たちのサッカー」を讒言のように繰り返したのは、監督にはまったく予想外だったに違いない。

バブル崩壊後、 欧米の実学教育を導入した日本の大学

筆者は、ザッケローニ監督の指導の「失敗」から、日本の大学における欧米スタイルの教育導入の「失敗」を連想してしまう。

ご存知の通り、日本の大学は「レジャーランド」と呼ばれてきた。「入学試験は難しいが、卒業するのは簡単」であり、高校までの厳しい「受験教育」から一転して、大学で学生はほとんど勉強をしなくなり、サークル活動、バイト、遊びばかりに熱中していたものだった。

ただ、レジャーランドとは、批判的な意味ばかりではなかったと思う。厳しい受験勉強で凝り固まった頭になった学生が、大学生活で勉強以外のいろんなことを体験することで、社会に出る前に人間的な幅の広さを身に着けるために必要な期間でもあった。企業側もそのことをよ

く理解していた。新入社員には入社後に多様な研修プログラムを課すことで、徹底的に鍛え上げられ、社会人として成熟していった。

だが、その状況は「バブル経済」が崩壊した90年代から変化していった。業績が悪化した日本企業は、大卒の新入社員の研修にコストをかける余裕を失い、「即戦力」の人材を求めるようになった。大学は、レジャーランドではいられなくなった。企業の代わりに若者を鍛え上げる教育が求められた。

また、当時は知識・記憶重視の日本の「詰め込み教育」の限界が指摘された時期でもあった。厳しい受験戦争の弊害として、小中高で校内暴力や若者の自殺が急増した。バブル崩壊後の経済停滞に、当時の政治家・官僚・企業経営者がうまく対応できなかったように見えたことも、知識・記憶重視から「考える力」を養成する教育への転換を求める声の高まりとなった。

大学は、社会からの要請に応えるために、教育改革に取り組みねばならなくなった。その際に参考となったのが、日本とは逆に「入学するのは簡単だが、卒業は難しい」と言われていた欧米の大学の教育システムだったと思う。

欧米の大学の教育システムの一般的なイメージは、端的に言えば①少集団のクラスで議論中心の授業②1つ1つの授業で、毎週膨大な資料を読み込む予習を課される。予習をしないと議論に入れない③授業後は、膨大な量の課題（レポート、試験）を課される④成績が悪ければ、容赦なく落第させられる。卒業できない学生も多い、⑤実学的である、というものだ。このシステムを、日本なりにアレンジして導入すれば、企業の代わりに人材育成ができると考えられた。

筆者が英国で博士号を取得後、17年ぶりに日本の大学に教員として戻った時、そこは筆者の知っている「レジャーランド」ではなかった。欧米的な実学教育の要素が盛り込まれた教育が展開されていた。だが、筆者は日本の大学で欧米的教育を取り入れることの弊害に、次第に気づくことになった。

予想外に「規律」「型」を重視する 欧米の大学教育

なぜ日本の大学で欧米的教育を導入すると弊害があるのか。それは、欧米の大学での教育が、ザックロー二監督が選手に課したような「規律」を重視するものだからだ。

日本人が欧米の大学に留学して、最初にとまどうのは、予想外に厳しい規律を重視する教育が行われていることだろう。欧米の教育には「知識（あるいは記憶）より、自分の考えをしっかりと持ち、議論できることを重要視する」という一般的なイメージがある。だから、日本に比べ自由であり、1人1人の学生の個性を重視されると思ってしまう。ところが、実際にはものすごく「型」に拘った、自由も個性もない指導が行われる。

それが端的に出るのは、「論文の書き方」の指導だ。欧米の大学では、昔の日本の大学では指導されることがなかった、論文の書き方のさまざまな決まり事を徹底的に指導される。論文は「序論→本論→結論」の構成になってないといけないとか、序論ではこの論文で書かれる内容が全て要約されて入ってないといけないとか、結論で本論になかった内容が新たに入っているといけないとか、講師が繰り返し、しつこいくらい学生に話すのである。

この論文作成の「型」は非常によくできたものだ。その型に従ってエッセイを書く作業をしていけば、自然に論理的な思考が練り上がり、文章が完成していくようになっている。論理的思考のパターンが次第に身に着いていくのだ。筆者は留学していた頃、日本に帰国した時には、日本の大学生に対して、「型」をしっかり教える教育をしようと考えていたものだった。

また、欧米の大学の小集団クラスも、非常に「規律」「型」に拘ったものだった。修士課程（博士前期課程）時代、ある小集団クラスの担当は、後に博士後期課程で筆者の指導教官となったローザ・ミュレ博士だった。ローザは、ザッケローニ監督と同じイタリア人であったが、その厳しさは以前この連載で紹介した（[第32回](#)を参照のこと）。

今回紹介するのは、ローザが小集団クラスで議論の「型」を重視していたことだ。毎週のセミナーでは、「発表者」と「討論者」を決めて、発表者、討論者の順に発表させた。発表者、討論者には、事前に与えた共通の「質問」に対して、「賛成」「反対」の議論を展開することを求めた。その後、他の受講生を議論に加えていった。このような「型」を毎週徹底的に守って学生の議論を進めさせた。

すべての受講生には、等しく発言の機会を与え、主張を明確に述べることを求めた。だから、議論がわからないからといって、逃げることはできなかった。日本から来たばかりで英語力も、思考力もまだまだ十分ではなかった筆者には、大変厳しいものであった。

更に、カリキュラムの内容である。社会学、政治学、歴史学、人類学、文学、など文系の学部、大学院では基本的に西洋哲学の基礎的理論を勉強するところからコースが始まる。現代では細分化された学問分野も、根本的な理論は同じであり、それを理解しないと全てが始まらない

いという考え方だと思われる。

また、経済学ではコースの始めに経済学の分析に不可欠な「数学」を嫌になるくらい徹底的にやらされる。欧米の教育では議論の基礎となる知識を身に付けさせることにかなりの時間を費やしている。学問というのは、勝手に思いついたことを話したり書いたりするものではないという考え方が徹底していた。

欧米の大学教育は、基本的に「躰」が目的だと気づいた

英国留学の7年間の間、欧米の大学教育のいろんな面を観てきた。その中で、1つ興味深かったのは、英語を母国語とする「英国人学生」が、学部1回生や修士課程に入った最初の課題である小論文でよく落第点を取ってしまうことだった。英語が母国語なのになぜかと驚くところだが、これは、小論文の「型」を無視して自分の好きなように書いてしまうからである。しかし、英語ができるからといって、スラスラと個性的に書いていても意味がない。大学で教える「型」通りに論旨を展開できていなければ、その小論文はアウトなのである。

また、筆者が博士課程後期に進んだ直後の、セミナーでの話を紹介したい。アルゼンチンから来た同期生が研究発表を行った。ところが、彼の20分間の研究計画についてのプレゼンテーションが大変だった。「わたしの考えは」「わたしのアイディアは」「わたしの見通しは」と、情熱的に話し続けた。持ち時間の20分を経過したところで、セミナーの担当教授が彼を止めた。「わかった。ところで、君の考えはわかったんだけど、理論とかどういう方法論で調査するとかはどうなっているの？」彼は頭を抱えた。「オー！まだ導入部しかしゃべっていません」。放っておけば、彼は1時間以上、話し続けていただろう。

こういう、個性的な学生たちに、なんとかかんとか「型」を教えようとする大学教育を受けて、気づいたことがあった。それは、日本でイメージするような「考える力」を伸ばすというより、シンプルに「躰」だということだ。

欧米の大学には、自国の学生だけでなく、アフリカ、アジア、中東、南米など世界中から留学生が集まってきている。これが、揃いも揃って強烈に「自己主張」をする人たちだ。それは文化、民族性のようなものに加えて、日本のように大学が「大衆化」しておらず、大学に進むこと自体が一握りのエリートだけという国も多いので、「異様に」プライドが高い。だから、学部生でも大学院生でも、大学に入る前から「世界の誰も考えなかった大発見を、既に考えている」みたいに思いこんでいる人も少なくない。日本人からすれば俄かに信じがたい話だが、

これは決して大袈裟ではないのである。

欧米の教育は、個性的で異様にプライドが高く、放っておけば空想の世界でノーベル賞でも取ったような気分の学生に、なんとかかんとか学問や社会のマナーを躰けることだったのだ。そして、単なる空想ではない「プロフェッショナルな仕事」を遂行できる人材に、形を整えていくことだったのである。

日本で欧米流の教育を導入することの 思わぬ落とし穴

この欧米流の「躰」の教育の前提には、大学に入学する前に、学生が既に「個性」「考える力」は身に着けているという考え方がある。これを考慮することなしに、欧米流を日本にそのまま導入すると、思わぬ落とし穴にはまってしまうことになる。

日本の教育というのは、基本的に子どもの頃から、「集団」に適応するためのスキルを身に着けることに主眼がある。幼少時から小中高の学校においては、「社会性を身に着ける」「集団行動のスキルを身に着ける」ことを最も重要視する。「個性」というのはあくまで集団の枠をはみ出さない範囲内で認められるということを叩きこまれるのだ。

また、日本では、大人が子どもに対して、先回りしていろいろなことを段取りすることが多くなってきている。「お受験」のために幼児教育の塾に通わされたり、それ以外の時間も各種「習い事」をさせられたり、休日には親が用意した娯楽の予定が入れられたりする。子どもの成長にあたって、危険や失敗につながる障害物は事前に除去される。このように育ってきた若者が大学に入っているのだ。そんな彼らに欧米風の「躰」を行ったら、どうなるのかということだ。

学生は、教員が段取りし、指示をしたことならば、レベルが高すぎると思われる課題でも、驚くほど優れた成果を出してくる。その最たる事例が、この連載で紹介してきた、筆者の大学の学部2回生を対象に、フィールドワークを実際に体験させるプログラム「研究入門フォーラム」である。

昨年まで3年間続けたこのUKフィールドワークで、筆者が段取りした訪問先はHSBC、BP、タタ・モーターズなどの企業、英国の地方行政機関、NGO、など多岐に渡った。それは、語学・専門知識の問題でかなり学生には荷が重いと思われたが、彼らはインタビューや資料収集に真面目に取り組み、見事な研究成果にまとめた（[第19回](#)、[第20回](#)、[第43回](#)を参照の

こと)。それは、「霞が関」の官僚の方に関心を持ってもらえるほどのものであった（[第21回](#)を参照のこと）。

ところが、この先には意外な展開が待っていた。UKプロジェクトを経験した学生は、3年生になって、毎年数名「上久保ゼミ」に入ってきた。筆者は、教員が研究課題を与えるのではなく、自ら課題を見つけて、研究計画を立てることを求めた。これまでの彼らの高度な業務遂行能力からすれば、難しいことではないと思った。

ところが、その期待はあっさりと裏切られた。ほとんどの学生が、「先生、自分はどうしたらいいんですか？」と聞いてくるばかりで、研究課題を見つけられなかったのだ。また、いろいろアドバイスして、ようやく見つけた課題でも、それに関連する本や資料を自分で見つけられないと、すぐ「テーマを変えたい」と泣きついてくる学生もいた。

筆者はその時、欧米の教育をそのまま日本に導入してはダメで、むしろ弊害が大きいということに気づいた。繰り返しになるが、日本の学生は、小中高の教育を通じて、既にしっかりと躡けられているのである。彼らに課題を与えて、「規律」に従って正確に解けと指示すれば、それはパーフェクトにやってくる。しかし一方で、自ら新しい課題を見つけ出して、前例のない課題を自らの力で解こうとする機会を学生から奪ってしまうことになっていた。

レベルの高い成果が出ることで喜んでいても、教育の結果出来上がる人材は、自分一人ではなにも考えられない、指示がないとなにもできない「ロボット」のような人材だったと言わざるを得なかったのだ。

忙しすぎる学生に、 物事をじっくり考える余地を与えるべき

今の学生はとにかく忙しすぎるように思う。1回生の時から、サークル、バイト、ボランティア、語学留学、インターンと、やるが多すぎる。我々の時代と違って、なにか1つのことに没頭できるような余裕はない。サークルも、4年間在籍し続けるというより、1、2年間だけ参加するという学生が多いようだ。就職活動が厳しいために、履歴書をビッシリ埋めないと就職が決まらないからだろう（[第78回・P.4](#)を参照のこと）。

だが、そんな忙しさの割に、学生はあまり物事をじっくり考えて行動していないように思える。さまざまな活動への学生の取り組みが、どこか表面的で薄っぺらく感じられるのだ。ゼミ、ボランティア、留学、インターンなど、いろんなことを万遍なくこなしているけれども、

それは、組織が段取りしたことをこなしているだけのようだ。自分でなにかを想像してみようという意欲のある学生は本当に少ないと思う。以前この連載で書いた、「やったふり」がキャンパス内に蔓延しているのが現状だ（[第36回](#)を参照のこと）。

日本の大学生に身に付けさせなければならないのは、与えられた課題を正確に解くことではない。それは、既に高校までに完璧に身に付けているのである。大事なのは、学生を課題漬けにして更に「躰ける」ことではない。彼らに物事をじっくりと考えさせる余地を与えることではないだろうか。

「トビタテ！留学JAPAN」で「グローバル人材」は絶対に育たない

かつて筆者はDOLで次のように指摘した（[「2011年を読む5つのポイント」](#)を参照のこと）。

『⑤若者（特に大学生）が「外向き志向」に一斉に変わる。

理由:日本企業の海外移転、社内英語公用化、外国人採用増の流れは止まることはない。日本の大学生は、「内向き志向」から一転して語学力を磨くために海外留学を目指すようになる。一見、荒唐無稽のようだが、日本人は「右向け右」で劇的に行動を変えるので、ありえない話ではない。』

学生の「内向き志向」は、現在でもあまり変化していないかもしれない。しかし、学生を取り巻く状況はまさに「劇的」に変化した。

文科省は今年、[「トビタテ！留学JAPAN」](#)という政策を打ち出した。2014年度から2020年度までの間に、現在5万人台に落ち込んでいる海外への留学生数を12万人に倍増させるという計画だ。77億円という巨額の予算を組み、民間企業と協力して高校生や大学生を海外留学させる新しい奨学金制度を創設するという。

更に、文科省は大学の国際競争力アップを目的として「スーパーグローバルユニバーシティ」という新しいプログラムを立ち上げた。世界のランキングトップ100を目指す大学を「トップ型」として10校、グローバル化を得意な分野でけん引できる大学を「グローバル化牽引型」として20校選定し、10年間支援するというものである。これら文科省の動きに合わせて、日本の主要な大学は競うように日本人学生の海外留学を促進するようになった。

ただ、残念なことだが、これらのプログラムで「グローバル人材」を育てることはできない。以前論じたように、「グローバル人材」とは、「人種・国籍、民族に依存せず、自らの高い専門性のみで国境を越えてキャリアアップしていく覚悟を持つ」人材である（[第70回](#)を参照のこと）。いわば、「究極的に強烈な個性を持つ」人材であるといえる。「個性よりも集団への適応」という教育を受けた日本人とは対極に位置する人たちなのだ。

それでは、「トビタテ！留学JAPAN」ならば、日本人離れしたグローバル人材になれるのか。それは無理である。現在、用意されているプログラムは、日本の大学が留学に関するあらゆる面倒をみることになっている。留学生は、現地で問題が発生したら、自分で解決するのではなく、まず日本の大学に連絡するように指導される。問題を解決するのは、日本の大学の担当なのである。これを「アームチェア（肘掛け椅子）留学」と呼ぶらしい。日本の学生の海外留学はアームチェアに座っているようなもので、難しい問題はすべて関係者が解決してくれるという意味らしい。こんなぬるま湯の環境で、グローバル人材が育つはずがないのは明らかである。

日本人という「国籍」に頼らず、グローバル社会を「個人」として渡っていこうという「覚悟」を持つ若者は、わざわざ文科省に導かれなくても、既に多数存在している。文科省がはめようとする枠は、高尚な覚悟を持つ若者を、札束をチラつかせて、わざわざ低レベルな「ぬるま湯」の世界に引きずり降ろすようなものだ。

一方、覚悟を持たないその他大勢に、国民の税金を渡して、無理やり海外に行かせる必要はない。そもそも、グローバル社会で活躍するのは、多種多様な生き方の1つに過ぎない。文科省の「行政指導」で、日本の若者全体が「右向け右」でグローバル化する必要はないのである。文科省が相変わらずの小役人的な了見の狭さで、若者全体を1つの方向に指導しようとするから性質が悪いのである。